翻刻　市立米沢図書館蔵『蝦夷恵曽谷日誌』について（二）

山本　淳

本稿は、標記の書『蝦夷恵曽谷日誌』（外題）における、第一巻に次ぐ、第二巻の全文翻刻である。同書は、市立米沢図書館に「高橋しん家寄贈文書七」として収蔵されており、同図書館デジタルライブラリ（http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/FQ007.html）にて、閲覧可能である。書誌情報をまとめれば、以下のとおりである。

○巻数　三巻一冊　（写本・原著）
○著筆者　濱崎八百壽（木麟・春湲とも）　米沢藩絵図方
○成立　明治三（１８７０）年
○体裁　竪帳
○寸法　24.5×16.2糎（縦×横）
○丁数　97丁
○蔵書印　「高橋蔵書」
○内容　米沢藩が支配の下命を承けた北海道の磯谷郡（現寿都町）に、藩士七名が現地調査を行った際の日誌であり、明治二年十月から翌年三月までを記録する。蝦夷地の風景や現地の習俗について説明し、自画による挿絵（彩色）を入れてある。

当該資料は、平成七年一月一日発行「広報よねざわ」の「郷土資料の散歩道」にも紹介されているが、過去にも小野榮氏により『よねざわ豆本第六七輯　蝦夷恵曽谷日誌』として翻刻が試みられている。ただし、日誌中所々省略されてもおり、全体を見るのに些か不便である。利用の便宜を図り、巻ごとに分けて翻刻するものであるが、第二巻を翻刻するにあたり、以下の手続きに従った。

一　なるべく原文に忠実に翻字することを旨とした。
一　原文の行に即して改行することとした。当該行に収まらない場合、二行あるいはそれ以上に跨ることを厭わず複数行で対応し、原文にて改行しているところでは、以下に余白があってもこれに倣って改行した。
一　細註箇所は、【　】に囲んで通常ポイントで翻字した。また、細註が三行以上に亘る場合、細註の改行に合わせて改行した。
一　原文改頁（半丁）に合わせ、末尾に　』で区切って丁数、表裏（オ、ウ）を示した。
一　漢字については、正字体と判断されるものについては正字体で、画数の省略が著しいものについては通行の略字体で翻字した。仮名については、基本的には変体仮名を通用仮名（歴史的仮名遣いで採用されている字体を含む）に統一した。
一　特殊な合字については、「より」「コト」「シテ」などと開いた。
一　特殊な繰り返し符合については、一の点を「ゝ」「ゞ」「〻」「〻」など原態を尊重した。二の点は「々」に写した。また、クの字点は

縦2山本13-24.indd　13　　2019/01/16　0:51

一律に「〃〃」とした。

一　ルビ・傍註修正（原文朱筆）については、右ルビと左ルビとが混在するが、右ルビは当該箇所の直後に右寄せで（　）に括って小字で、左ルビは当該箇所の直後に左寄せで（　）に括って小字で示した。

一　註を要するものについては右傍に［　］付きで適宜施した。

一　原文中、地名には右傍線を原則としてルビ付きに限り左傍線が施されているが、これを一律右傍に施した。

本資料の姉妹篇ともいうべき別筆の『恵曽谷日誌』が北海道大学附属図書館北方資料室に蔵せられているが、こちらは見分隊長の山田民弥が筆録したものである。時を同じくして成った記録であり、こちらと対照させることによって、明治初期北方地域見分の実態がより克明になるものと思われる。両筆資料的性格の差異については、拙稿「米沢藩士による蝦夷地見分日誌二種」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』43号・二〇一六）にて卑見を述べた。

なお、第一巻の翻刻は、右報告書45号（二〇一八）に掲載した。その後聊かの誤読が確認されたが、字句訂正については、第三巻翻刻の際に合わせて行う予定である。

今回も翻刻をなすにあたり、本資料御架蔵の公益財団法人米沢上杉文化振興財団、ならびに関係各位に格別な御高配を賜った。同時に、本文解読に際しては、本学日本史学科小林文雄教授による、ひとかたならぬ御教示に与った。ここに記して、改めて御感謝申し上げたい。

〈翻刻部〉

蝦夷日誌

自十一月九日

十二月三十日迄

附録見聞奇談』（中扉）

［見返白丁］

北海道後志国磯谷（イソヤ）【本名ヱソウヤ】蝦夷西岸ニ而北にヲカモイ岬西に弁慶（ヘンケイ）岬有相對して湾をなせとも乾に向ふ

濱辺ニ而萬里の海風常に波高し東南に後方（シリ）

羊蹄（ヘシ）山昆保（コンホノホリ）山雷電（ライテン）岳峨々とそひへ中にもしり

へつ山ハ蝦夷第一の高嶽にて四時氷雪なり形ち

富士に彷弗（彿）たり彼山より出る大川を後別（シリヘツ）川と云

【巾八拾間余】ノツト岬大黒沢（タイコクサワ）弁天島（ヘンテンシマ）名所也【弁天島ハ蝦夷八景の一也】産物ハ

鯡　昆布　鮑　煎海鼠　鮭　海苔其外雑魚多く

寂よろしき場所也十一月九日雪風当地戸数人』1オ

別を調ふ

土人家二軒人別六人【男四人女二人】ノツト哥永住五拾七軒人別

三百四拾七人【男百九十一人女百五十六人】シマコタン哥四拾五軒

人別二百

八拾七人【男百四十三人女百四十四人】ルーヘツナイ哥四拾三軒人

縦2山本13-24.indd　14　　2019/01/16　0:51

別百九拾
六人【男百女八十八人】ユウキナイ哥　拾三軒人別六拾二人【男
二十八人女三十四人】惣シテ
百五拾七軒　人別八百九拾四人之内男四百七拾弐人女四百弐拾
弐人右永住之在所ハ出羽奥州越後辺のもの多し
畑ハ三万八千六百拾一坪　船澗掛ハ弁天島【深サ七尋八尋】百石より
千石迄入運上金百四拾五両二分冥加（増運上）金七百二両一分三朱』1ウ
冥加金七拾両〆九百拾七両三分三朱南歌棄（ヲタシツ）堺ユウキナイより
北後別（シリヘツ）堺ノツト迄一里二拾三丁五十二間余同十日雪風申上刻
歌棄（ヲタシツ）出張
開拓権少主典石子谷五郎同使掌萩（茨カ）野浅次郎来る
明十一日土人立合境界を定め土地人民可相渡旨爾し
重役権大主典石原荒吉当時石狩本府江出張ニ付
後日帰館まて仮證書にて請取渡之方依之俄に境
柱を大工に命し夜中吉田氏筆にて従是西米澤藩
支配所後志国磯谷郡能津登【同ユウキナイ分都合二本用意す】同十一
日
晴朝辰之刻右役人并運上家役人立合にて東ハ後別』2オ
川岸【自運上屋一里七丁】西ハ由宇幾内村中小川を以堺とす【自運上
家拾六丁五十三間】
両所江境柱を建而證書取かわせ無滞相済酒宴を
設けて役人を謝す

土地引渡仮證書

一磯谷郡　　従ユウキナイ　ノツト迄

右者此度其藩持ニ相成候ニ付貴殿對席土地
并家居人員共ニ引渡申處正ニ候也

明治二巳十一月十一日　　萩野　使掌　印
石子権少主典　印』2ウ

米沢藩　山田民弥殿

当藩よりも右の證書を差出す夜中江刺（ヱサシ）之住
源次郎来る此もの元米沢下長井成田村卯左衛門
家のものニ而拾二年以前国を遁出此地在住の
よし同国のもの故呼出し面談す亥之刻より微雨
至東雲晴同十二日風天午後当地之土人をはしめ　諸
役人を呼出し舊例之如く面談し且諸品を
賜ふ第一書に土人惣乙名ヱヽサク脇乙名シイト【当時山穢（磯）ニ
行未戻目見せす】小遣シヱタサ右両人板縁頰江呼出す左に』3オ
[3ウ4オ後志國磯屋郡米澤藩支配所之図]
通辞岩蔵右に
支配人祐蔵其
真中江賜物廣
盃江のせ左右江
行器江酒を入
【かのホカイ極古物にて笹リントウの金板有
義経公軍中に用給へし器なるよし】
盃臺江髭揚を
添【盃ハ飯椀の如し何れも如圖極古物　[下部挿絵]』4ウ

縦2山本13-24.indd　15　　2019/01/16　0:51

にて金高萌[?]繪有珍敷品也髭揚ハ箸の如く又へらに似たり】土人（アイノ）
の装束ハ萌黄のシヤランヘア
ミシ（衣ノコト）を着し【廣袖 半天にいろ〃〃の縫模様有
紅き縁を取し衣なり】木綿縫の脚半を
かけ【蝦夷のメノコ（女）木綿アツシ江いろ〃〃
縫をなす甚美事なり】赤地金襴の陣羽織を
着し【山丹錦なる歟】又壱人ハ紺のシヤランヘアミシ（衣ノコト）に猩々
緋の陣
羽織を着し倶に箕踞礼拝す
一清酒　壱斗五舛
一莨　六把
一形附　壱反半
一米　壱俵八升入』5オ
右者今般当藩支配被 仰出候二付已後支配致
候間漁業畑作共二是迄之通精心可致依之右
之通とらせ遣す
傍の通辞岩蔵蝦夷言葉にて達之趣細かに
言変る半時余にして畢る酒を頂戴する礼式
奇なるコト筆紙に難尽諸道具の古物着服の
美目を驚す也次二運上家役人町役人百姓代を
呼出し目録を賜ふ又惣百姓江酒を賜わる【但百姓代江札
にて遣す】同十五日申真野氏入沢氏下村氏右三人当地請』5ウ
取方荒増相済帰国之方に決し離杯を汲辰ノ刻
磯谷を發足す夜亥之刻頃より雨強く風起り波
濤如雷同十八日雪風波高し早朝漁父来り報て
曰今海岸江海嬪二疋来れり早く見給へと急き
出てこれを見るに波間より首を揚け半身を
顕し浪をかけるさま形ち馬に似たり【諺二海馬といふ毛色赤黒し】
猟法を漁父に問ふに鉄砲にて打と云彼海獣岩
上に多く集り臥躰するコト有其中に壱疋番獣有
高き所に上り安危（キヅカヒ）を見量るなりかわる〃〃臥ていつも』6オ
一疋ッヽ油断せさるなり彼番獣をねらひ打又目を覚
せしをうつ時ハ数疋獲ると云同二十日非常の雪風
波高さ三丈斗弁天堂の屋根にかゝる此日より四五日打
續き朝毎に海嬪二三疋ッヽ見ゆ【氷魚（コッコ）と云魚を食に来ると云】
夜酉ノ刻
石山大主典運上家江止宿此人元舊幕の調役なりしよし
附属二人嘩喟たる妾壱人同廿六日雪風夜酉上刻当地
掛の役人石原権大主典止宿元長州藩也十二月三日大雪
寒風日中暗く月夜の如し細字不見惣而水気のもの
凍り板抔すへりて歩行あふなし夜中油不燈十年』6ウ
以来なき寒気なるよし同四日五日前同断白中燈
なくてものを弁しかたし同七日雪風歌棄（ヲタシツ）詰石子
権少主典今般シヤコタン詰被命家属引連止宿夜中
離杯を汲嫡子福太郎六歳にてよく歌且踊るいと
面白く旅中のうさを慰（ナクサ）めり妻ハ三拾歳斗りこれ又
佳婦也同八日晴至而穏也同九日十日爐辺の水不凍

縦2山本13-24.indd 16　2019/01/16 0:51

同十一日寒風甚強く水気のもの悉く凍る白中晴夜
の如しシマコタン願翁寺以使僧寒中之窺ニ来る同
十二日雪風前同断歌棄（ヲタシツ）より石原氏家来久吉来る』7オ
主人不快故吉田氏招請たきよし此もの元髪結渡世
目あかし俠客体のもの也昨戦争之時分石原ニ頼れ
脱走江入込陣中を見すかし帰る処山越内（ヤムクシナイ）にて召捕れ
十五日之間縄をかけられ函館江引れ入牢三十日余終に
首をはねらるへき處歌棄（ウタシツ）村中より貰ひ請られ
不思儀に命を助りしか此度我娘を献し石原氏の
家来と成南木玖吉と云【委敷ハ見聞の
部に出しぬ】同十六日朝至而穏か
東風にて波静か也巳刻頃より大雪如崩積而五尺余同
十七日非常雪吹にて往来稀也天暗く午後より燈を』7ウ
［8オ挿絵］
照らす同廿一日雪風寒風甚し開拓御用掛大
伴遊叟止宿【元薩州人流浪して外国江牛を賣渡世とせし
と云つんほうにて耳少しも不聞乍去蝦夷出張第一の
人物成よし】同二十五日雪風午後晴此日暮餅搗迚当濱
の若者数十人前夜より運上家江集り金太鼓
をならし歌を唱ひ囃子立其賑ひいわん方なし
朝四時分相済【五俵搗と云】函館松前辺にてハ俠客体の
若もの数十人集りいろ〃〃の装束にて面々杵を
携ひ藝妓を雇ひ三味太鼓にて家々を搗廻ると
いふ同廿六日中雪少し降る未刻頃鮫泊り（サメトマリ）武平』8ウ

漁小屋より出火壱軒消失す同廿七日微雪川口
大主典止宿同廿八日中此日門松をはしめ眉玉惣而
正月の飾りをなす【但し蝦夷地松竹梅なし樅（トヽ）を以松に
かへ笹を以竹にかゆ】
浅川大主典柴田権大主典止宿五島銑之丞殿家来
当地出張の先触来る同廿九日晴れ海波なし
同三十日中未刻よりあられ風烈し逆浪起る
午上刻各目出度越年す未下刻五島殿家来
勝浦偵大橋清太郎止宿但し五島殿支配地ハ
後別（シリヘツ）而己にて人家僅か五六軒宿すへき所なき』9オ
ゆへ暫く当所滞留の方勝浦氏か話当年函館（ハコタテ）
寒暖計拾二度なるよし［以下余白］』9ウ

見聞奇談

江刺（エサシ）源二郎話

昨辰年夏六月蝦夷北地（唐太辺ノコト）に行しか土用中袷に
肌着にて暑からす朝夕ハ羽織を増し夜分ハ綿
入に蒲團をかけ臥してよろし滞留中四五日打
つゝき曇天風烈しきコト有其夜薄團をかさねて
伏す翌朝外面の方人聲して騒敷に打驚
何やらんと起上り急き出て様子を問ふに水桶（ヲケ）
に薄氷張し也此辺よりヱトロフ島辺夏日炎』10オ
天に土中壱疋も埋れハ其塵土凍て鉄石の如しと
いふ

縦2山本13-24.indd　17　　2019/01/16　0:51

支配人祐蔵話

宗谷（ソウヤ）辺ハ冬日馬を引に川々凍て鏡の如くすへりて
荷馬危し依而馬を横にたをし四足に縄を付
氷上を引渡す也近年ハ馬これに馴れ川端ニ
ゆけハ自ら横に臥四足に綱をかくるに少しも
不驚馬士に曳れ行岸に至れハ独りはね起
駈行と云惣而北地ハ冬十一月より海水凍て』10ウ
其上を往来する處多し彼氷春二三月頃よりくつ
れて流れ出る厚サ三四尺大サ五六拾間或ハ七八十間余も
有もの幾つも流れ出て岩に当れハ岩砕け年ニ彼氷
に打れ鯨鯢の死たるを二三疋ッヽ得ると云和船ハ勿論異
国船も此氷に恐れ其時分ハ通行せす
先年北地通行之節三月中旬也しニ彼凍に乗て狗の
二疋流れ行を見る狗ハヲウ〃〃と泣狂ひ終に波間に
沈ミ死す土人も彼氷に乗り沖江出され死するもの
間々有と云氷にふるれハ船砕くる故誰有て助舟も不出』
11オ
只々見殺にすると云春の末追々暖気になれハ波に
ゆられて不図も岸はなれする也大なるもの一里余も
有りと云氷上の往来ハ正月限り二月よりハ渡るへ
からす折しも斯る事有と云
磯谷後別（シリヘツ）川土人氷の上を往来するに春暖になれハ
氷破れ落死するコト間々有よつて二間余の棒を
携ひ往来す氷くつれて落たる時かの棒をたより
岸江上ると云氷厚サ二三尺

利惣次話』11ウ

江刺（エサシ）沖奥尻（ヲクスリ）島と云有格別猟もなき地也隔年に
蛇（ヘビ）と鼠と来り住す一年ハ鼠多く人家の屋根より
縁の下迨至る亦一年ハ蛇来りて山野に充満す
石狩山中蕗苳の大なるもの七八尺葉の大サ五尺余
彼茎江鯡壱束入と云当後別山中にも丈五尺葉傘
の如くなるハ多しと云
東岸ヲサマンヘアフタ邊ニ而膃肭（ヲットセイ）を猟するハ晩秋の
頃なりシユシヤと云魚を食わんと浮ミ出るを*鑓ニ而
獲る也此海獣猟師の家内のものゝ真似をするコト』12オ
［ウオ
12 13 挿絵 氷魚之図］
好也依而猟に出たる後ち家内皆臥し眠り居て
よし左すれハかの膃肭も寝りて不動其時**鑓
にてつく也此魚を食時ハ一生頭痛を病ます虚労
の大妙薬なり
蝦夷海に十一月より二月頃迨氷魚（コッコ）と云を猟す
形ち河豚又蟇に似たり腹の臍を以岩に吸付
居る也食すれハ和かにして佳味也此辺ニ而よく
吸物と成すかの魚凍化して魚と変すと云

吉田氏話』13ウ

十一月廿八日壽津（スッツ）江病療に行しに彼病家至而
実正しきものニ而色々馳走し風呂をたて寒さ
凌きに入給ひと案内され勝手江行見るに只大
釜鍋に火をたき湯気沸々たり外に風呂場も

*「金＋突」
**「金＋突」

縦2山本13-24.indd 18　2019/01/16 0:51

見えす早此鍋江入給ひといふ大に恐怖し猶豫する
うち案内人彼鍋江板を二枚うかし是を尻に敷て
真中江入給へ鍋縁江さへさわらねハ決而不熱安心ニ而
緩々めし給ひと頻りに進められおそる〃〃這入
見るに左程暑くもなし至而気味よろしこれそ』14オ
誠の五右衛門也と大笑しつ
十二月六日祐蔵紙屑籠より拾ひ出せし書物
之写
前文破れて不見　其後種姫様御入輿の節被召出白髪奉差上
百人扶持被下置候
毎月三里灸治之事
朔日　左八右九　二日　左九右十　三日　左十六右十六
四日　左九右十　五日　左十右九
六日　左九右十　七日　左九右八　八日　左八右八
右者長命之儀御尋有之候處先祖より毎月朔日より』14ウ
八日まて三里灸治仕候段申上候
百九拾四才　万平
百三拾三才　妻
百五拾三才　倅
百三才　孫惣領
孫産拾八人御座候
寛政八辰九月十五日御目見之節言上仕候趣且
大坂御済之仰ハ此拾四歳之時ニ御坐候其節之噂等
承及候趣色々申上候』15オ

二百二十四才　万平
二百三才　妻
百八十三才　倅
百三十三才　孫惣領
右ハ安政五戊午年承り以今繁昌之由誠ニ怡敷
コトニ御坐候間写上申候　右ハ中折立紙江書しものなり
歌棄重吉話
北蝦夷（唐太島）シユマヲコタン辺ニ一年住居せしに冬日流水は
勿論井戸も凍り水ハ一切なしよつて氷雪を鍋にて』15ウ
煮解し用ゆ爐中の灰凍て一寸も浮上るよし夜中
臥すにハ爐辺江蒲團四ッ着かふり翌日起て見れハ
上着凍ると云　畳の布合より上る地気凍て数十の針を
植如し迚も住居なりかたく当時歌棄ニ来り住居す
と云
山田惣轄の話
蝦夷地に黒狐有りと云コト函館（ハコタテ）にて皆聞及し也
武佐（ムサ）峠を下り焼山（ヤケヤマ）辺を通る時一疋の黒獣古樹の
陰より飛出たり馬士とらへん迚追かけ暫く有て』16オ
戻り来り熊とおもひしか狐なる故追須（ズ）して帰ると
いふ其故を問ふに当地狐を取れハ祟りをなすと云
此コト祐蔵に話せハ蝦夷には三毛の狐有と云【黒狐赤狐白狐】何れ
奇なり
石狩（支配人祐蔵話）
石狩（イシカリ）国札幌（サッポロ）と云ハ極山中にて此辺にて随一の寒冷の

縦2山本13-24.indd　19　2019/01/16　0:51

地也先年津軽より開拓役人且百姓数百人冬を
通し四五月頃に成けれハ各體腫破れて日々三
拾人程ッヽ死せし由七百人之内死人三百余人【冬日寒氣
にて身体凍り』16ウ
夏になり解て腫やふれて即時に死すと云】
土人（アイノ）熊あるひハ海獺惣而獣を猟獲れハ壇を築きかの
獣を飾りいろ〃〃の菓或ハ酒を備へ祭之落涙して
礼拝す獣肉を以て酒宴を催し親類を呼集め数
日か間引かすに酒を飲肉を食すれハ各帰るなり
其後獣の首を切門口之柴垣江かけ木幣を作り鎮
守と崇め奉り厚く祭祀なり
熊の子を取れハ不殺して家に引来り我妻（メノコ）の乳を
呑しめ養育し成長すれハ毒矢を以殺之親類を』17オ
［17ウ挿絵］
集め祭之前同断鎖を以熊をつなき第一の矢は
其家の惣領子二の矢を次男三男と次第に射させ終に
あるし毒矢壱本にて射殺なり彼熊を養育せ
し妻（メノコ）熊か可愛不便迚泣〃〃其肉をしたゝか喰
と云甚可笑コト也

松浦氏か日誌

石狩（イシカリ）山中夕張（ユウハリ）辺ニ而鹿の足骨を賣て七八本ッヽ
錦之盆にのせ出す是を食ふにハ其骨を砕き
中より一條の肉を出し食ふ至而甘味なり其骨ハ』18オ
冬分干て貯置来客為に備ふと云

歌棄（ヲタシツ）久吉か話

一昨年十月中脱走兵十四艘の軍船にて鷲ノ木（ワシノキ）濱江
上陸せし時歌棄（ヲタシツ）詰役人石原荒吉【当今権大主典也】に頼れ
彼陣中に忍入人足にまきる大甲丸と云蒸気船江
薪を運ひ【此舟石炭已に尽て
真木をたき舟を走らせし也】舟中の器械兵糧悉
見すかし夫より大野（ヲヽノ）の陣江行かんとせし道ニ而明日歌棄（ヲタシツ）
岩
内（イワナイ）両場所江兵隊三百人繰出しの模様聞つけこのコト早く
石原江知らせんと引返し夜九ッ時分山越内（ヤムコシナイ）迚来りしに』18ウ
閑者之趣脱走江注進するものあり【南部成毛東五郎と云者
久吉を知るもの也脱走江注
進せしとなり】急ニ追手掛り取早遁るへき様なき故敵陣の
様子且追手かゝり難逃召捕れしと細々認メ此宿の髪
結同商賣ニ而入魂なる故金子ヲあたへかの手紙を頼み直様
歌棄江走らせ我も又勝手ハ知りたれハ山つたへに黒松内（クロマツナイ）迚
逃のひしか不運而終に生捕れ又山越内（ヤムクシナイ）江引れ正義隊長
武田司の前江出され吟味になり【此時の書役ハ松本
孝蔵と云もの也】口書を認メ
我に爪印を押させ函館（ハコタテ）江引れ十日余縄にて責られ又
三拾日余入牢し再吟味になり終に首をはねらる』19オ
へき処諸方より命乞の願書出て其ためゆるされ
歌棄に戻り此度石原荒吉開拓役人ニ而当地出張故
家来と成南木久吉と名のるよし

縦2山本13-24.indd　20　　2019/01/16　0:51

函館（ハコタテ）松前（マトマナイ）辺ハ盲人或ハ眼病を煩ふも少也といふ但
蛇を多く食ふ故なるへし
祐蔵話
唐太（カラフト）島【一名北蝦夷】冬十二月餅搗にあひとりするものゝ
手に餅か凍つき折々手の皮をむくと云寒中寒
暖計七度暑中ハ四十七八度』19ウ
函館（ハコタテ）ハ昨年大暑之節七拾八九度迄に成しと云
唐太（カラフト）辺ニ而ハ冬日荷物を運送するにハ雪舟につけ
狗に引す也荷重けれハ五六疋にて引と云狗ハ甚大なり
当磯谷（イソヤ）辺ニ而彼狗皮を着服とするもの多し甚大にして
熊の皮に不違見ゆる也
当年ハ拾年以来なき寒気成よし北地寒暖計
無度なるよし石狩（イシカリ）奥札幌（サツホロ）北見（キタミ）国宗谷（ソウヤ）辺
詰合の
もの夏にならハ腫破れ死するもの多からんと云
石原氏話』20オ
長州方叡善と傳と何れもでん〃〃と斗り云そは
聞分けかたし依て人偏でんか差でんかと云
勝浦氏か話
伊豆　海外　無人島　暑中寒暖計百十度
吉田氏
正月十九日壽津（スツン）より蟹の大なるを持来る二尺余至而
美味也祐蔵云此辺ニ而六尺七尺位の蟹を獲るコト有
摺身にして料理につかふに百人前にも成と云

歌棄久吉話』20ウ
春彼岸より鯡群来る也【くきるとハ魚多く
来り子を産コト】鯨鯢彼鯡を
追来り拾丁程沖にありて汐を吹これに恐れて鯡
岸に集り不散也此時差網（刺）あるひハ立網にて獲る
【此故に漁人鯨のコトを
ゑひす様と云】鯨に鱸と魚附来り折しも鯨を喰
殺すコト有といふ又鯨のうちに蛇鯨といふ有【又ヲワカンケとも
云虵の数年を
経て海に入龍又鯨と変化す體にハ海草又螺貝
ひしとつき岩石の如し此魚毒魚にて鱸も不食と云】彼魚数の子を食に
岸迄来ると云
蝦夷奇品
自長満部（ヲシヤマンヘ）山越内（ヤムキシナイ）迄村々に銅金銀山有ユウラツフ
金銀山』21オ
あり蛇田（アフタ）脇舶ヲクリカンキリ多しニイカツフ金銀坑有
浦川（ウラカワ）奇石出る幌泉（ホロイツミ）山中奇石多し十勝（トカチ）萩の大
なる
もの有クスリ黒水晶有ハホロ砂金多し石狩（イシカリ）潜龍
魚夏村（シヤコタン）虎斑竹島古牧（シマコマキ）金山有瀬棚（セタナイ）砂金有
岩内（イワナイ）石炭山有【英人イラスムス開之】
磯谷（イソヤ）諸品直段　巳十二月
一六両　弐七両　米壱俵　四斗入　一拾両　餅米　同　一貳分
酒壱舛

縦2山本13-24.indd　21　2019/01/16　0:51

一壱分玄米　薪壱鋪 五六
函館（ハコタテ）同　巳十月』21ウ
一壱貫五百文　米壱舛一八百五拾文　南京米三舛
一三両　味噌壱樽【拾三〆目入】一四貫文　大坂酒壱舛　一三米
塩壱舛
一壱〆百七拾人　溜壱舛 一壱歩　人足日雇
松前（マツマイ）同　巳十二月
一拾弐両二分　餅米壱俵　一三両　薪壱鋪

好兵衛話

在所　伊達郡山不入村に一握蕨とて灰かけすして
食ふ蕨ありと云【蝦夷土人をはしめ当地永住之もの蓬或ハ蕨を
食ふに皆灰かけすしてひたし又あへものとして】
食ふよし』22オ
蝦夷馬雪中を
駈あるく故馬毛
に氷つひて百萬
の鈴をかけたる
如くから〃〃と
音する也美
事いわん方な
し　［下部挿絵］』22ウ

祐蔵話

熊ハ秋の土用より春の彼岸迄土穴に籠り居
る也これを穴熊といふ膽至而よろし彼岸より穴を
出て山野を駈廻り渓に下り魚を食ふ故膽あしく
不成用これを野熊と云
北地（唐太）ニシトンナイと云所有【自宗谷（ソウヤ）三十七八里】魯西亜
人多く来り
今城郭を築く普請寂中なるよし北蝦夷ハ
魯西亜人ヲロツコ人山丹人和人雑居のよし此地魯西
亜に陸つゝきといへとも間に三里の川有此辺朦々として』23オ
風吹コトなく海色黒く紫にて水重く泥の如く舟の
通行大に悪しといふ

髪結清助か話

先年函館（ハコタテ）奉行竹内殿に頼まれ北蝦夷（唐太）江行
し時六月十七日昼後雨強く風起り大霰れ（アラレ）降
強雨にハいつもあられ降よし極暑之時分曇天
には袷にて寒し是悲綿入ならねは凌かたしと云

松前藩兵隊仕組之写

小隊一番　隊長　麓逸学【副長軍監　伯侯使者　小隊司令　半隊司令
左嚮導　右嚮導　鼓手』23ウ
小輜重軍監手】組士従士足軽〆一小隊五拾五人小隊二番隊長厚谷清
兵士前同断　三番隊長新井田早苗同　四番隊長佐藤男破魔同
五番隊長竹内学同　六番隊長松崎数矢同　七番隊長
松屋（尾）源太郎同　八番隊長豊（？）田左百里同　惣撃隊長
南条小弁頭同　魁武隊長松前邊同　奇兵一番
長官松前伊豫　奇兵手附属二番蠣崎民部同　三番下国
貞之丞同　四番蠣崎熊太郎同　五番藤倉織部同　六番

縦2山本13-24.indd　22　2019/01/16　0:51

下国都太郎同　七番蠣崎衛士同　格藩嚮導下国
弓男五拾人　旋條鎖[ア]一門大砲長田中孫平次【砲手砲司】舶』24オ
用砲一門教師稲川竹十郎【砲司砲手】小頼方本営付惣長官
松前右京　軍事惣掛尾見雄三下国藤七　軍事方
新田主税　用心兼之松崎多門　蠣崎多浪布施和泉明石康平
福井源蔵　書記尾山微三　諸役人大會斗小會斗大書記
小書記　斥候使書　大病院　典領[エ]　格藩嚮導器械奉行
同取締同方作事方大工職　大小荷駄方　鼓手喇叭方
以上
本府札幌（サッホロ）辺諸品直段　午二月
一三朱　米壱舛　一壱両　酒壱舛　一壱歩　大根三本　一壱朱　鶏卵
壱ッ』24ウ
一弐両　沢庵漬壱樽八十本入　一三朱　荒粉菓子壱袋　一三朱　煙
草一丁目入
一壱歩　小梅漬八拾粒入　一弐両弐分　賣女一夜花代　一壱歩米壱舛
人足日雇【但札幌（サッホロ）切開之人足】　余ハ推て知へし
二月十三日
銭函（セニハコ）小樽内（ヲタルナイ）濱辺ニ而麒麟の形ちなる古木を拾ひ
得たり甚佳木也因而當號を木麟と改む
開拓日誌之内
開拓少主典髙橋吉次郎先日献上せし記録之内
文化度』25オ
皇国魯西亜と接境之儀諭書有左に記す
我国と其国との境に互に音信を通する處を立
たきとの事なれとも前々も申通り差許かたき国法
なり我国の者ハヱトロフを限り其国の人ハシモシリを限り
にして其間の島々江ハ人家を設けさるへし然る時ハ
互に出合事なき故雙方無事ならん若し其国
よりヱトロフ迄来るコトあれハ止事を得す此方の国法
通り厳しく計ふへし
一去年函館（ハコタテ）を出帆の時残し置たる文体にて有』
25ウ
其国より申越たる事とも詳かに答へす我国の
製度はかり申諭せし故其国江持帰りてミせし時
品定此方への申方明白ならすに成へきかと疑ふと
見えたり其国の役人申處我国の法度にさわる故
一々答に及はさるなり去年渡来せし船中のもの共
我国へ對し少しも無礼不法なきわけハ留置し者とも
を残らす帰したるニ而知るへし境を定め應接の所を
建るコトハ我国法にて許さるなれハ渡来のものゝ取
量によりたる事にてハなし此わけをよく〃〃心得』26オ
帰りて其国の役人に申聞すへし
石狩人足又吉話
土人のメノコ（妻）唇の辺江入墨するにハ瀬戸かけを以て
疵をつけ古着木綿を煮て藍を取り彼疵江すり
こむと云又魚獣の膽をすり込と云説もあり
二月十四日
札幌（サッホロ）本府にて生鮭魚を食ひしかいとめつらしと
いゝけれハ給仕人云にハ只今頃千年辺ハ鮭猟さかり

縦2山本13-24.indd　23　2019/01/16　0:51

なるよし』26ウ

北海道　六港と云ハ　函館（ハコタテ）　幌泉（ホロイツミ）　松前（マツマイ）

江刺（ヱサシ）　壽津（スツヽ）　手宮（テミヤ）

松浦氏手塩（テシホ）日誌

爰に子供を木皮もて筐の様の物を作り是に

入置樹の枝に下けてあり其由縁を聞に風吹は

揺快く寝ると此の如して育つる時ハ長生して

丈夫なりと云

三月廿五日

蝦夷鯡場出稼の男女舟にて通行するに』27オ

［27ウ挿絵］

逆風になれハ何国にても舟をつけ上陸し風待して

また乗いたすなり

此日北場所廻りの出

稼舟本陣前濱江

上り男女二拾人程

海辺江如図仮屋を

半時斗にして

立派に補理真

中にかきを下け　［下部挿絵］』28オ

火を焚き一泊して次之日早天に出帆せり栄右衛門

話には先年函館（ハコタテ）出火之節舩手の者多き故又

彼仮家を暫時に補理雨露を凌しを外国人感

心の体にて見物せしか其後天幕を製造せり

これ天幕のはしめなる歟

磯谷（ヱソウヤ）詰寒中予か着服

木綿筒袍　木綿肌着　真綿胴着　同綿入　木綿綿入

鳶

夜中ハ敷蒲團二枚毛團を布　夜着　掛布團　二枚』28ウ

朝起て上着の蒲團を火燵に掛れハ濡物を干す

ことく湯気沸々と立上る也【蒸発気寒気の為に薄團江

とゝまる故か】

十一月八日より十二月三十日まて五拾三日内晴三日

曇七日　日輪を拝せし日十二日　雨天三日　白中燈を照せし

日二日　爐邊の水不凍日九日　其余悉く雪風烈敷

日なり　当年ハ十年以来なき寒気なるよし』29オ

縦2山本13-24.indd　24　　2019/01/16　0:51